

四十六 陶淵明という人

「蝶の雑記帳四十五」で、「失望の時代」だと思ふ現在を陶潜の時代と対比して考えてみようとして、石川忠久著『陶淵明とその時代』を読み、さらにその時代の歴史を以前よりもくわしくおさらいした。陶潜の時代について考えたことはそこにいくらか書いたけれども、陶淵明という人についてももう少し考えてみたい。

第一節

陶淵明の詩文を理解しようとした先人たちは、作者の経歴についても関心を寄せた。けれども、彼の経歴は精確には知られていない。今回、石川忠久の著作を読んで、経歴について軽視できない違いのある二つの推測があることを知った。二つの説は比較検討が十分なされて決着を見たわけではないらしい。その問題は、淵明の文学とそこに表われている人柄を理解するのに重要な意味をもつ、とわたしには思われる。門外漢には荷の勝ちすぎる問題だが、敬愛する人の実像に迫りたいので、考えてみよう。

陶潜がのちに篡奪者となった劉玄の下で仕官した（「仕えた」とする表現が多い）、とする

ことに反対する人はいない。ところが、彼の詩の一つが「鎮軍参軍」になったと言うのをどう理解するかで見解が二つに分かれる。一つは、もう一人のちの篡奪者で鎮軍將軍となった劉裕の参軍(幕僚)になったとする見方(多数説と呼ぼう)である。ウィキペディア「陶淵明」も、わたしの読んだ岩波文庫『陶淵明全集』(松枝茂夫・和田武司訳注)もその説を採用している。これに対して、淵明が参軍となったのは別の將軍劉牢之だとする異説があり、石川忠久はこちらの説をとる。

古来注解者の見解が分かれる理由は、一次資料として陶淵明自身の詩文しかなくて、彼の若い知人顔延之が書いた追悼文「陶徵士誄(るい)」以外には、同時代の記録文書に記載されるものがなかったからである。ほかに資料となりうるのは、没後六十年ころ沈約によって編まれた『宋書隱逸伝』の修飾の色の濃い伝承だけである。今に残る『陶淵明全集』の序「陶淵明伝」は、ほとんど『隱逸伝』の要約だそうだ(それを没後百年ころ書いた蕭統は南朝四番目の梁の皇太子で、陶淵明を慕い「同時代でなかったことを恨んだ」というからおもしろい)。「宋書隱逸伝」と「陶淵明伝」は、現代的な方法の水準から見ると、経歴を確定するほど根拠ある資料とはできないだろう。淵明がその時々具体的に何をしていたかは、本人が詩文に記すことを、信憑性の高い資料(史書でも朝廷の記録文書に基づくこと)の多い部分)とつき合わせて推論する方法しかないのである。

陶淵明は行政区江州に属した潯陽郡柴桑県の人である。江州の中心都市は現代の九江市（長江中流域の交通の要衝）で潯陽はそこにある。柴桑に田地（莊園）を所有していたのだろう。淵明自身の書いた詩文から知られる経歴を、年代順に箇条書きしてみよう（アラビア数字は『全集』の順番。Cは干支を参考に挿入し、干支を欠くAは『全集』の順序どおりに置いた）。

A・Hとは別の詩から、最初の仕官は三九四年（三十歳以前と推定される）。

A 詩(39) 「始めて鎮軍參軍となり曲阿を經しとき作る」

B (40,41) 「庚子の歲(四〇〇年)五月中、都より還るに、風に規林に阻まる」二首

C (19) 「斜川に遊ぶ」 序に「辛丑(四〇一年) 正月五日」と書く。*注1

D (42) 「辛丑の歲(四〇一年)七月、赴仮して江陵に還らんとして、夜塗口を行く」

E (43,44) 「癸卯の歲(四〇三年)、始春、田舎に懷古す」二首

F (45) 「癸卯の歲(四〇三年)の十二月中作り、従弟敬遠に与う」

G (46) 「乙巳の歲(四〇五年)三月建威參軍となり、都に使いして錢溪を經る」

H 辞 「歸去來今の辞」 序に「彭沢の令となつたが」自ら免じて職を去る。仲秋

より…官に在ること八十余日、…乙巳の歲(四〇五年)の十一月なり」と書く。

これらの年に起きた関連する出来事を歴史年表から抽出すると次のようになる。

三九八年、京口(鎮江)にあつて都の建康(南京)を守る北府軍の長が政權を握つていた皇弟に反旗を翻したが、配下の將劉牢之に裏切られて切られた。劉牢之が北府軍の總帥となる。

三九九年、十月、道師孫恩の指揮する民衆反乱で浙江一带は大混乱。北府軍の鎮北將軍劉牢之と副將の衛將軍が鎮圧し、孫恩を海上に追い払う。(石川書によれば、劉牢之が鎮衛軍府を開いたと『宋書』に書かれているという)。

(前年の騒ぎの中で江州の刺史(長)となつた桓玄は、この年、西の荊州(拠点は江陵)を奪い取つて西府軍の總帥かつ三州の刺史となり、長江中流域を支配下に置く)。

四〇〇年、孫恩の再侵入。副將は戦死したが、劉牢之が反乱を鎮圧。配下に劉裕がいた。

四〇一年、長江をのぼつて来た孫恩軍は劉裕に撃退された。

四〇二年、孫恩の反乱が平定された。朝廷は桓玄の不穩な動きに討伐の軍令を発したが、劉牢之の寝返りで、三月桓玄が建康に入城し政權を奪い取つた。桓玄に軍權を奪われた劉牢之は反撃しようとしたものの、再三の裏切りに劉裕らが加担してくれず、逃亡、自殺。

四〇三年、十二月、桓玄が、皇帝を退位させて、「楚」の皇帝を称した。

四〇四年、二月、劉裕が桓玄に反旗を翻す。蜂起は成功して建康を占領。桓玄は潯陽さらに江陵へ逃走し、潯陽に置いていた前帝を江陵へ移す。劉裕、鎮軍將軍となる。桓玄は五月

に討たれた。各地で戦闘が続く。劉牢之の息子劉敬宣が建威將軍・江州刺史になる。四〇五年、荊州の桓玄の殘党が平定された。復位した前帝が三月建康に帰還。劉裕が多くの権限を手中にして東晋の実権を握り、京口に幕府を置いた。

この年表とつき合わせて、陶淵明が四〇〇年前後にどのように身を処したか考えていこう。Dによれば、四〇一年七月淵明は休暇が明けて江陵に還った。江陵で江州を含めた長江中流域を支配していたのは、刺史の桓玄である。淵明はそこで仕官していたことが分かる。多数説は、桓玄が淵明の住んでいた江州の刺史になった記事を根拠にして、三九九年から桓玄に仕えたとする。Cの序には四〇一年の正月に二、三の隣曲とともに斜川に遊んだとある。同行三、四人が班座しての舟遊び(小舟だろう)で、みんなで詩をつくりそれぞれ年齢と出身地を記したという記述は、江陵に出仕していて各地から来ていた同僚と正月遊びをしたと考える方が、岩波文庫『全集』の江州で隣人と遊んだという解釈よりもふさわしい。詩中の「ゆくゆく帰休せんとす」という句も、出仕していたがやがて休暇をとるつもりだったことを明かす。そうすれば、休暇明けで江陵に還ったというDと符合する。

ところが、その年の冬に母親が亡くなって潯陽に帰郷する。EとFの詩が詠う四〇三年の田舎での生活は、儒学に親しみまた母や家族を詩文に登場させる心性の持ち主が、母の

服喪二十五か月を遵守したこととして理解できる。

問題は干支の書かれていないAにある。多数説は、淵明が鎮軍参軍になったと記すのを、年表の四〇四年に劉裕が鎮軍將軍となったことに対応させ、淵明は都に上つて劉裕の参軍になったと考える。しかし、劉裕は二月の蜂起が成功し首都建康に入城して主導権を握つたものの、五月に桓玄が討たれるまで、淵明のいた江州(潯陽)から荊州一帯にかけてが戰場だったし、淵明は、潯陽に連れてこられていた晋の皇帝がさらに江陵へ移されたことも、桓玄の死後も荊州その他の地域で戦闘が続いていることも知っていた。そういう戦乱のさなか、服喪以来静かに暮らしていた彼が、急に腰を上げ(不穩な潯陽に家族を残し)、東上して劉裕の参軍になったりするだろうか。Aの詩に表出する心情とその後の行動は、この機会に立身出世を求めた、あるいは晋朝再興のための(または権力争いの)戦いに加わつたとする見方を支持しない。四〇四年に上京したとすると(どういふタイミングとするのだろうか)、Gで言うように翌年の三月にまた上京するには、それ以前に帰郷してはなくてはならない腰のすわらない動きだ。それに、石川説の説くように、四〇五年三月の「都に使いして錢溪を経る」というGの句に、「我この境を踐(ふまざる)に、歲月ははなはだすでに積もれり」とすると矛盾する。なぜなら、長江を下つて上京する途上にある錢溪は、一年足ら

ず前の四〇四年の東上するとき(たぶん帰途にも)通ったはずで、その感慨はふさわしくないのである。多数説は、史書に鎮軍將軍というぴったりの言葉を見つけ、淵明がのちに「宋」の皇帝になった劉裕に仕えたと考えうる意外さに目を奪われているのではないか。

石川忠久たちのもう一つの説は、鎮軍が鎮軍將軍を意味するとは限らない、と考える。年表の三九九年に出る鎮北將軍や鎮衛軍府の參軍なら、簡略に鎮軍參軍と呼べるから、陶淵明はこの年に劉牢之の幕僚になったとするのである。その年、劉牢之は北府軍を率いて孫恩の乱の鎮定に当たった。この解釈は、東晋の成立期に大司馬まで進んだ曾祖父を誇りにしていた淵明が、晋王朝を危うくする反乱の鎮定に参加した(かつての大司馬の曾孫が幕僚のポストの一つに採用される可能性は大きかっただろう)という理解に導く。それは、Aの詩が京口の東南にある曲阿を通過するとき作られたこととよく符合する。劉牢之率いる北府軍は、孫恩の乱を鎮圧するため京口を出発して浙江方面へ向かった。參軍である淵明もその軍事行動に従い曲阿を通った、とごく自然に理解できる。しかも、詩の「若齡より事外(世事の外)に寄せ、懷いを委ぬるは琴と書に在り、褐を被て欣んで自得し、しばしば空しきも常に晏如たり、時来たりていやしくも冥会せば、たずなを宛けて…、策竹簡書付を投げて…、しばらく園田と疏(とおさ)かる」と詠む内容も、題に言う「始めて」という言葉も、反乱鎮定軍に馳せ参じたという気分にぴったりだ。「若いときの猛志」や「性

は剛」という言葉も、現実の行動で裏打ちされていたことになる。他方で、詩の終わりの「真想は初めより襟(むね)に在り、誰か謂う形跡に拘せられると、しばらくは化(時勢)によりて遷り、終には班生のいおりに返らん」という句は、戦争にいつまでもかかわるつもりのないことを表明していて、四〇〇年五月の詩Bの「都より還る」にほどよくつながる。AがBの前に置かれていることが意味をなす。四〇〇年の帰郷は、孫恩の乱がいったん鎮圧されたからだろう。『全集』全体の詩文に表われた淵明の人柄からしても、それ以上の従軍は性に合わなかったからと推測できる。

ここでCとDにもどって、江陵での仕官の事情を考えてみよう。淵明が反乱鎮定軍に参加していた三九九年、桓玄は戦って江陵の西府軍の軍権を奪い取り、江州に加え荊州などの行政権を掌握した。淵明は、Aの詩で「班生のいおりに返ろう」と詠んで軍事から去ろうとする気持ちをはのめかしている。Bの「母親のいる旧居を望む」の言葉は、兄弟のないうちの家長として家族と莊園(農地)を保全しようとする心構え(四言詩「命子」や「勸農」)にむくむを表明し、それが帰郷した大きな理由だったかもしれない。そういう彼が出仕するとしたら、軍職ではなく行政の何かの職ではなかっただろうか。北府軍の参軍だった者が、不穏な情勢のさなかに、朝廷と北府軍に敵対的な西府軍の総帥桓玄の軍営に鞍替えすると

いうのでは、情勢の認識がおかしいし、節操の観点からもきわどすぎる（四〇四年に逆のことをしたとする多数説も同様である）。出世を望むのなら、人脈のできた北府軍か都にいてもよかったのである。行政府の決裁権の強くない職だったと考えれば、四〇一年、西府軍の総帥桓玄が策謀に忙しかった不穏な雲行きの中でも、休暇をとって帰郷することを希望し実際にそうなったことが理解しやすい。淵明が役所で刺史桓玄と顔を合わせる機会は少なかつたのではないか。おそらく、陶淵明がのちの篡奪者桓玄（と劉裕）に「仕えた」とする後世の人たちのゴシップ風の言い方は、実態を正確にとらえていない。

それでは、Gにあるように四〇五年にもう一度建威参軍になったのはなぜだろうか。その建威將軍とは劉牢之の息子劉敬宣である。父が桓玄に追われたとき自分も亡命したが、かつて孫恩の乱でいっしょに戦った劉裕に呼びもどされ、手柄を挙げて、淵明の住む江州に赴任して来たのである。陶淵明が三九九年に劉牢之の参軍だったのなら、劉牢之の部將で息子の劉敬宣は、参軍の淵明と知り合いの間柄だったはずだ。だから、劉敬宣が参軍のポストを提供して処遇した可能性がある。ところで、岩波文庫『全集』の解説は、このころ、劉敬宣を恨む者が劉裕に讒言し、劉敬宣は不安を抱いて解職を願い出たという史書の記録から、四〇五年（皇帝が都に帰還したのと同じ）三月、都に使いしたのはこのことと関

係しているかもしれない、と示唆する。この推測は、淵明が劉牢之の參軍だった場合、劉牢之の部將だった劉裕とも顔見知りだったはずで、現実味を増す。劉敬宣は、自分も劉裕も知り合いの淵明なら、その人柄からしても、自分の本心を伝えられると期待できただろう。劉敬宣が淵明を參軍に任命した理由はこれだったかもしれない。Gの詩の「勉強してこの役に従う。一形、制せらるる有るに似るも」という句は、必ずしも親しくない二人の知人の仲たがいを防ぐために仕方なく都に上る気分を表現している、と解釈しうる。そして、建康へ行く道中で錢溪を見て、三九九年東上したときと四〇〇年の帰途にも通ったことを想い出して、その五、六年の間に世の情勢が急展開したことを考えたとすれば、「歲月はなはだすでに積もれり。晨に夕べに山川を看るに、事事ごとごとく昔の如し、…、彼の品物の存するをみるに、義風すべて未だ隔たらず」という感慨はふさわしい。

けれども、Gの詩の最後は、「一形、制せらるる有るに似るも、素徳(平素の心) 易うべからず。園田 日に夢想す、いづくんぞ久しく離析するを得んや。終に懷うは帰舟に在り、まことなるかな 霜柏(節操)を守ることを宜しとするは」と結ばれる。この上京は一時のこと、參軍は臨時に雇われたことだ、という心づもりが漏れ出ている。戻ってくるかと軍職を離れ、仲秋には、戦いに巻き込まれず上司のいない県令になった。十一月には、それも辞職してHの「婦去来兮の辞」を書く。素心を貫いて最終的に園田に帰ったのである。

第二節

わたしは、石川忠久著『陶淵明とその時代』を期待して読んだ。「序」が、「一切の先入観を排除すること」や「淵明の人物を時代に即して見る」と表明しているのである。南北朝晋の上層人士の考え方や・行動様式・教養、先祖から江南人である陶淵明のそこでの位置など、教えられたことが多々あった。淵明が劉牢之の下僚だったという説に導かれたのもそうである。しかし、個々の議論の中で疑問を感じ、「過去の人物評価を故意に逆転して、世間の耳目を惹く法があるが、それとは根本的に異なる」という表明が必ずしも当たらない点があるように思った。一つ二つを記そう。

現実の人間は、さまざまな欲求を持ち、社会に生活してあれこれ曲折のある行動をする。陶淵明も例外ではない。だから、通念のままに、淵明を理想的な清貧の士とあがめるのは正しくないだろう。それにしても、通念の正しくないことを説く石川の議論は、批判のあまり行き過ぎたところがあると思う。石川は、「孫恩討伐に当たる劉牢之に馳せ参じて従軍したのも、戦功による封爵の可能性を求めたのであろうし、篡奪を目論む桓玄に付いた

のも、一躍勢族にのし上がる期待を抱いてのことであつたらう」と考える。一人の人間は、一方で立身出世を望みながらも、他方でそれとは違つた志をもつものである。淵明が立身を求めたとこれほど言いつのれば、詩の志は虚偽に近づき詩全体をそこなう。

さらに石川は、立身に挫折した淵明が、当時一定の名譽ある地位であつた隱逸の士にならうとしたと考へ、「高らかに隱者の歌を詠つた、その着想と出来栄えにこそ、淵明を評價しなければならぬ」とまで言う。そして、それは「淵明を悪く見よう、というのではない」と。しかしそれは適正な見方だろうか。Cの詩を隱退してからの年代に移し、「二三の隣曲」とともに斜川に遊んだとするのを、「(王羲之の)蘭亭の雅遊を摸して一場の野宴を主宰し、以て声誉を決定的たらしめんとした、というような状況を推測せしめる」とまで解釈するとなると、陶淵明の詩文鑑賞はずいぶん遠くまで行くことになる。

清貧についても事実と違ふと言う。詩に詠む貧窮は、隱逸の流行した魏晋の時代における一種のポーズと見なす。腹違いの妹がいたから父には妾がいた、彼の五人の子のうち二人は同年の生まれというから、双子とするより彼にも複数の妻がいたと考へた方がよい、詩句その他からも、彼はある程度の農地を所有する地主か貴族だつたとする。たしかに、淵明の知人顔延之の弔い文が「爵は下士に同じく、禄は上農に等しい」と言う。しかし、詩がまったくの虚偽でないなら、同類の士にくらべて実際に家産が少なかつたのだから。

五か所ぐらい荘園をもち出仕もし、二十七人もの子をもうけた藤原定家さえ収入の不足を嘆いたのだから、官職を辞して暮らすことを選んだ陶淵明が、仕官していたころの蓄えも尽きると、家族を養い使用人をかかえて生計を立てるのに貧しいと感じてもおかしくない。それが詩文に現われるのをとがめてはいけない。言葉のあやがあるとしても、詩に詠まれた清貧は、ある程度似た状況があり、自己の選んだ道を歩み続けるための決意の表現であった、とわたしは思う。

石川忠久が従来の理想化された淵明像を打ち破ろうとする議論は、陶淵明の詩文の存立を脅かすほどだ、とわたしは思う。さまざまな下心が石川の言うほど強かったのなら、どうして人は淵明の詩文に深い味わいを感じることができのだろうか。

わたしは再び陶詩を読み始め、当然のことながら、彼の詠んだ詩にほんとうに正対することの大切さを痛感した。そして、石川忠久の批判しようとした通念はそれを怠った世評が形成した二次的なものだった、という思いを強くした。通念を崩すための石川の議論が極端に走ったのは世評を相手にしたからで、過去のしつかりした考察だけを吟味すれば、もっと妥当で、陶詩を貶めることのない理解に至ったのではないかと思う。

第三節

岩波文庫『全集』の注解は、現代までの注解史を集成した一つと見なしてよいだろう。そこに掲載されている陶淵明の年譜には、四〇〇年前後の経歴が多数説に従って書かれ、さらに、初めて出仕した年や別の官に召された年、そのほかに、家族に出来事の起きた年などが記されている。家族に起きた事は淵明の詩文に基づくのだろう。詩文の解釈に大きく影響することがなければそれを詮索する必要はない。この節では、淵明の経歴をもう少し探って、身の処し方とその奥にある人柄について考えてみよう。

初めて仕官したのが二十九歳・三九三年ころとするのは、本人の証言によっている。すなわち、五言詩「飲酒、その十九」に、出仕した年を「この時立年(三十歳)に向かつていた」とあるからだ。通説は、最初の職が「江州祭酒」(学事の長でそれをすぐに辞めたこと、次に州の「主簿」に召されたけれども就かなかったこと、引退後ずいぶん経って召された「著作佐郎」にも就かなかったことを、陶淵明の経歴に加える。それは『宋書隱逸伝』の記載に基づく。淵明よりもほぼ二十歳若い顔延之は隠退後の淵明と会ったようだから、彼の追悼文にはある程度信憑性がある。その追悼文が著作郎に就かなかったことを証言して

いるので、この点は確かなのだろう。しかし、ほかには「初め州府三命を辞す、後に彭沢の令と為る」ぐらいしか書いていず、潯陽にあった州府での仕官の実態を示さない。最初の職「祭酒」をすぐに辞め、さらにまた「主簿」に就かなかつたとする点について、確かでないとしておくのがよいだろう。淵明自身は、仕官の経歴について、塵網の中にあつた年月は十三年と概括的に述べるだけだし、最初の出仕についてもその職を語らないのである。注解者が詮索したがる「世事」よりも、彼は、もっぱら詩の質を高めることに専心しているように見える。ただ、AとGとの詩では、参軍になつたという旅の事情が旅情にからまつているので参照の言葉を添え、「帰去来の辞」では、故郷を離れた場所での辞職の事情を説明するために官職名を具体的に書いたのだ。

石川忠久は、淵明が仕官の初めに祭酒になり、召された主簿の職に就かず、召命を受けた著作郎の官に就かなかつたのは、当時の隱逸の士に多く見られた一定の地歩を固めようとする方途だつたと論じ、先にも触れたように、家産のあつた淵明が詩に貧窮を詠むのは、隱士としてのポーズだつたと解釈する。ところがこの議論は、『宋書隱逸伝』の記述をそのまま受けとることによつて成り立つのである。それは、『隱逸伝』が通念の淵明像を生み出す元となつたことを考えると、逆立ちした議論ではないか。

『隱逸伝』は、「起ちて州の祭酒となるも、吏職に堪えず、少日にして、自ら解いて帰

る」と述べる。ところが調べてみたら、州に祭酒がいたか不明だが、中央では主簿よりも高い地位のようだ。細分しなければ、主簿と参軍は同じ七品、県令も小さい県で七品、引退後に召命(徴)を受けた著作(佐)郎は六品(七品)で一ランク上の地位らしい(ある種の叙勲を受けたことになる。それで顔延之が「陶徴士」と呼ぶ)。そうすると、仮に州祭酒にしても州主簿にしても、実際に就いた参軍職に見劣りする地位ではない。最後の県令も同様である。曾祖父が大司馬だったとしても晋朝以前からの江南人だった陶氏の、しかも傍流の淵明が任官できたのは七品程度のポストだったのである。内心で不満だったとしても、仕官するとすればそれに甘んじるほかはなかっただろう。『隱逸伝』が地位に不満で辞めたと書くのは、隱逸を強調するための文飾ということになる。淵明本人は初めて出仕した時の感想として、「飲酒、その十九」で「志意恥ずる所多し」としか書かない。この言葉は、地位についての不満よりも、自分の性格から役所仕事にうまく適応できなかったことを言うのだ。最後の県令も以前より低い地位ではなく、郷里の潯陽あたりから来る小人(視察官)を正装して迎えるのはいやだと職を投げ捨てたという有名な伝承は潤色だろう。

淵明の若いころの詩は知られていない。そのせいで、三十代前半までの彼の暮らしぶりとはよく分からない。だが一般に人は、人生を送るのに、壮年まで何らかの仕方ですべて

かわる活動をするものである。賦の一つに「講習」という語が見えるけれども、儒学を学んだ淵明が塾を開いたかよく分からない。三十五歳以前に莊園経営に努めた風も見えず、むしろ隠退後の詩「園田の居に帰る」に、「荒を南野の際に開かんとす」や「我が土は日に己に広し」と書く。中世中国の社会体制の下で、三十代の教養ある下士に、ほかはどういう活動があるだろうか、収入を増やすためにも仕官していたと想定するのが最も自然である。ここでわたしが思い浮かべているのは、モンテーニュである。淵明よりもはるかに大きな領地をもっていたモンテーニュは三十七歳まで仕官し、思索の生活を始めたのは隠退してからである(彼に倣ったモンテスキューも)。今考えていることはわたしの想像に過ぎないけれども、三十歳前の仕官を役人がいやですぐに辞めたのに、三十代後半からまた出仕し、四十一歳で再び辞職というのでは、高らかに「帰去来の辞」を詠った人の出処進退としてちぐはぐだと思う。歳をとるにつれての心境の推移にもそぐわない。

石川の言うとおりに淵明を理想化しないとすれば、普通人として、初めて出仕してから引退するまで、家族の生活や家計などを気かけ、自分の進むべき道をあれこれ考えたにちがいない、とわたしは想像する(定年よりも三年早く五斗米をけって辞表を提出したので、彼の心中を察する資格がいくらあるだろう)。いくら役人生活に苦勞したからといって、初めて就職して間もなく氣位を尊重するあまり辞職したとするのは、淵明を徹底した隠逸の士

とするためにする付会だろう。「帰去来の辞」の序の、「子が増えたころ仕官の必要が生じた」や「かつて人事に従ったのもみな口腹のために労苦を果たしたのだ」という懐古は、二十九歳ころ短期間出仕しただけの場合よりも、何年間か仕官していた場合にふさわしい。初出仕以来、彼が居住地の潯陽で仕官を続けた可能性が高い。中国の官僚制度の下でそういう経歴があったとすれば、「策を投げて」東上し参軍に就任したことや、潯陽を不在にしたあと江陵へ出仕したことが無理なく理解できる。実際に、前年一月に退職して間もない四〇六年ころに詠まれたと推定できる詩「園田の居に帰る、その一」の、「誤って塵網の中に落ち、一たび去って十三年」という句が、おおよそ十三年間仕官したという淵明自身の認識を語っている。多くの注解者が淵明の詩文をおろそかにしてきたのだ。

陶淵明の転機は四〇二年から四〇四年にかけての時期にあり、喪に服して田舎にいた彼が政変と戦乱を観て何を考えたかが問題だ、とわたしは思う。喪の明けた四〇四年、淵明は何をしていて何を望んでいたのだろうか（この年、州府への復帰を延期したのではないか）。外的なことは知られないが、彼は、次の年四〇五年、内心の推移を「帰去来の辞」で明かす。その序で、貧窮のために小邑に用いられることになったと書いて、気乗りのしない職に就いたことをもらした言葉が、祭酒の職をすぐに辞め、県令職も我慢できずにさっさと

帰郷したという『隱逸伝』の逸話を生み出すことになったのだろう（『隱逸伝』が「祭酒となるも、吏職に堪えず、少日にして、自ら解いて帰る」と書くのに対し、序には「少日におよんで眷然として帰らんかの情あり。…自ら免じて職を去る」とある。似た言葉づかいは『隱逸伝』の種本がここにあることを示唆する。このことはまた、最初の職をすぐに辞めたとするのが事実かを疑わせる）。この序は、かつて子供たちの養育費用を心配したことや親戚の者が就職を勧めたことなど、普通人にありふれたことも書く。それは、氣位高く清貧や隱逸を氣どる言辭ではない。序は長くて饒舌なのだ。そして辞詩は、淵明の作品の中で最も情念に訴え人を感動させる。観察者の眼で見ると、自分の性分に合わなくて長い間抑圧していた心中のフラストレーションが、辞職を決心したことで噴き出した感がある。貧しさのために大した地位でもない職に就いてきたという強迫観念が口をついて出たと見える。しかし、そのことが辞職の直接の原因ではない。序の最後の段落で明らかにされるのは、妹が亡くなったので葬式に出席するために職を去ったということである。兄は生母を早く亡くした腹違いの妹と仲良く育った。その妹の死を知ってこみあげてきた感情が、長いあいだ心にわだかまっていた役人生活を辞めたいという思いを噴出させ、それを実行させたのである。

陶淵明は、時代に失望し、また自己の志を解き放つために、田園に帰つての生活を選ん

だ。それが出来たのは、顔延之の言う「爵は下士に同じく、禄は上農に等しい」という生活の基盤があったからである。詩「園田の居に帰る」の句「方宅は十余畝(千五百坪以上)、草屋は八九間(室)」が、それを証言している。彼の荘園の規模を過少に見たり過大に見たりする必要はない。くり返しになるけれども、宮使いの収入がなくなつて不自由になつたことは確かだろう。成人した五人の息子たちにどういふ身の立て方をさせたかも関係したはずだ。現役で働いて収入を得ている者には隠退した老人がわびしく見えるものだが、顔延之が目撃して追悼文に「貧しい」と書いた実状が晩年にはあつたのだろう。

しかし、陶淵明の詩文は、彼の人生が貧しかったなどと誰にも言わせはしない。

むすび

さて、すでに先行する議論があるのだと思うけれど、以上のように解釈すれば、第一節で考えたAからHまでの事績には、それへの前段階があり、さらにそこから隠退生活が選ばれたと観る陶淵明の全体像が、おぼろげながら浮かんでくる。それは、理想化された清貧な隠逸の士というイメージとは異なり、一人の人間の身の処し方として現実的に十分ありえたものである。そして、生み出された詩が、生活の中で去来する心情を吐露した味わ

い深いものとして、普通人にも理解できるものになる。陶淵明は、生き方を詩の中に詠み込み、詩に詠み込んだことを生きようとしたのである。けれども、それに尽きるのではない。かの人の資質は豊かで、蘇東坡が嘆賞してやまないほど詩文の対象は広がる、一海知義が言うフィクションの世界まで。

*注1 Cの詩がつくられた年の干支辛丑の「丑」に対して「酉」とするテキストがあるらしい。

その場合には四二一年で五十七歳だという。もしそれが正しければ、第一節の議論からCを外せばよい。詩の最初の四句は、「開歲たちまち五日、吾が生ゆくゆく帰休せんとす、これを念(おも)えば中懷(心)を動かし、辰(吉日)におよんでこの遊びをなす」とある。辛酉を採用する論者は、年が明けての加齢が生(の)帰すところを連想させ、帰休は死の暗喩と解釈して、三十七歳よりも五十七歳がふさわしいとするようだ。第三、四句の調子もその解釈へ誘う。

他方、辛丑を採る注解者は、「帰休」を本来の意味「家に帰って休む」と理解し、第二句をそのうち帰休するという意味だと考える。漢文はむずかしい。どちらが適当かは文脈で判断するしかない。序では、「正月五日、天氣澄み和やかに、風物閑かにして美わしく、…(仲間と)斜川に遊ぶ」に続けて、詩句の原形である散文で景色を叙述する。そして、欣んでいるだけでは物足りず思いついて(みんな)で詩を賦し、日月が往くのを悲しみ、吾が年の留まら

ないのを悼んだと述べる。暗喩とする解釈は、のびやかな調子で情景を詠う第五句—十二句へのつながりを屈折させ、そこに暗い影を落とす。他方、帰休を本来の意味で受けとる解釈は転調せずに第五句へつながり、序にある遊びの気分と調和する。わたしは、まず、帰休が暗喩でない方に軍配を上げて、詩がつくられたのは帰休が本来の意味をなす引退前の四〇一年としよう。だが、よい詩は多声の調べを奏でる。それを詩人は隠喩の効果的な顕現によって果たす。景色を喜んでいた詩は転調して、人生の一回性を詠嘆して結ばれる。

二〇一六年、太陰曆九月九日

蛇足

陶淵明は淵明が名で字(あざな)が元亮、あるいは名は潜とされている。潜を名とする場合は、後年その名に改めたもので淵明が字だという。けれどもこの説明は、揺らいでいて合理的ではない。老いた園丁は、名が元は亮、字が淵明、陶亮・淵明だったのではないかと愚考する。これなら、諸葛亮・孔明に匹敵する立派な名前だ。四言詩「命子(子になづく)」で、長男儼の字を孔子の孫の孔伋の字「子思」にあやかって「求思」としたやり方と符合する。

淵明は父のした自分への命名に倣ったのかもしれない。田園に潜む生き方をするようになったから、字の淵明にふさわしい諧謔を名の方にこめて潜と称したのではないだろうか。

